

「資料紹介」

峯 陽一著 現代アフリカと開発経済学 東京 日本評論社 1999年 304p.



南アフリカに関心のある読者なら峯氏の名をよく御存知であろう。ピコの『おれは書きたいことを書く』の訳者であり、岩波新書『南アフリカ「虹の国」への歩み』の著者なのだから。精力的な仕事家である峯氏は、岩波新書が出た直後から『経済セミナー』で「アフリカ経済論序説」の連載に取りかかるのだが、実に刺激的であったその誌上講義が、手応え十分な学術書となってわれわれの目の前に登場した。経済学者に読まれてよい久々のアフリカ経済論である。実際『アジア経済』では絵所秀紀氏が書評を担当した。

ルイス、ハーシュマン、ペイツ、ヒゼーン、セン。経済発展論や開発経済学に携わるものなら必ず接する理論家たちが、著者による情熱的な読み込みによって図太い一本の論脈に編まれていく。しかも、日本人アフリカニストの諸業績がそれをしっかりと補強する形で引用され参照されていく様は圧巻である。なかでも絵解きの核となっている本山美彦、絵所秀紀、吉田昌夫各氏の業績は、評者も親しく接してきたものなので、著者と膝を突き合わせてその議論に耳を傾けているような、愉快的興奮を味わうことができた。

優れた本はすべからず、陰伏的に著者自身を語っているものだが、本書もまさしくそうである。この本は、アフリカとアフリカ学のなかに生きている峯陽一という知性を描いている。実に逞しい知性である。大家の議論に傾斜することなく、むしろそれを包摂して、著者独自のアフリカ観が武装されていく。評者はかつて指導教授から「自分の学問をつくれ」と薫陶されたが、その言葉を思い出した。

一点。136ページの「MERG」はGEARの誤りである。
(平野克己)

アマルティア・セン著 黒崎 卓・山崎幸治訳 貧困と飢饉 東京 岩波書店 2000年 305p.



本書の原書は、1998年ノーベル経済学賞受賞者のセンが80年に発表したもので、南アジアとアフリカの飢饉の再考を通して広く問題提起したものとして知られている。

センは飢饉を食料総供給量の減少によって説明するFAD仮説を周到に批判し、この仮説にもとづいたエチオピアやサヘルの飢饉対策の不的確さを指摘する。FADに代わってセンの主張する権原アプローチは、人々が自ら所有する手段を用いて必要な財（飢饉の場合は食料）を入手し消費する能力や資格——すなわち権原（Entitlement）——の獲得と喪失の過程に注目する考え方である。センは市場経済における権原を、交易、生産、自己労働、相続・移転において生じる関係と設定しており、その含意の広さゆえに読者のいずれの問題意識にも再考を迫る説得力を持っている。

労働の米価に対する交換比率を通した生活困窮化度の計測などによって、飢饉対策が必要な時期と集団、地域を導き出す手法は、食糧供給にとらわれた過去の失政に冷静に対峙するセンの姿を印象づける。それは飢饉対策に限らず、既存のデータがつくりあげる領域や集団、地域にとらわれている経済調査や政策立案の危うさを読者に覚醒させるかのようである。

気鋭の開発経済学者である2人の訳者が解説にて指摘する点、例えば問題のコントラストを強調するあまりに事実が過度に捨象される点や、小国と州の比較の単位などは確かに気にかかるが、「理論家としての業績ゆえに許され」（「解説」298ページ）、「問題提起のための挿し絵として……比較研究を受け止める」（同299ページ）ことに読者は何の異存も持たないであろう。

この邦語訳版には、1990年の講演「飢饉撲滅のための公共行動」が収録され、さらに、訳者解説では、原書出版後の主要な権原アプローチ批判がわかりやすくまとめられており、飢饉をめぐる約20年間の議論を追うことができる。
(吉田栄一)

栗本英世著 未開の戦争，現代の戦争 東京 岩波書店 1999年 237p.



本書は、岩波講座文化人類学第6巻『紛争と運動』（青木保ほか編 1997年）のなかの著者の論文「未開の戦争，現代の戦争」をもとに新たに書き下ろされたものであり、『現代人類学の射程』（全12冊）のうちの1冊である。

本書の構成は以下のとおりである。

序章で、人間は生来攻撃的なものとするホップズの間人観と、平和的なものとするルソーの間人観という二つの異なる基点からそれぞれ発展していく「戦争研究」と「平和研究」の潮流が概観されている。第1章では人類学における戦争研究の背後にある思想の問題点が指摘されている。第2章と第3章では近代ヨーロッパとの接触以前の「未開の戦争」について、第4章では植民地化に対する抵抗としての戦争、5章では現代の民族紛争について、具体的な事例とともに論じられている。

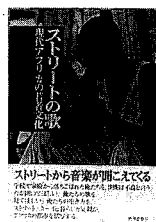
本書は、戦争論の底流にあるさまざまな思想を分析するとともに、人類学の膨大な文献から現れてくる「戦争」研究を批判的に論じている。フィールド経験に裏打ちされた綿密な文献調査による著者の論考は、「現代」から切り離されて論じられがちな「未開の戦争」に新たな視座を呈示するものである。

著者の視点はあくまで「未開の地」にある。「未開の地」での戦争がどのような自生的発展を遂げたのか、外部からの接触によってどのように変貌していったのかという過程に著者は注目している。

本書は、戦争論であると同時に人類史でもある。そしてその視線は現在と未来へも向けられている。今世紀における「未開の地」と異文化との活発な接触が、未開の戦争を大きく変貌させつつあるという現在の状況を考察し、著者は今後の文化人類学の存在理由にも思いをはせている。

(児玉由佳)

鈴木裕之著 ストリートの歌——現代アフリカの若者文化 京都 世界思想社 2000年 238p.+vi



とにかくおもしろい。現代アフリカの大都市に暮らす人々をこれほどまでに活写した本があったら

うか。コート・ディヴオアールの中心都市アビジャンの「ストリート」で生活する若者の文化を、著者は彼らと同じ目線から語る。「ストリート・ボーイ」たちと同じ音楽やダンスを愛し、スラングを操る著者の報告を日本語で読める幸運に、われわれは感謝すべきだろう。

「ストリート・ボーイ」はアビジャンの一般市民からどのように見られているのか、彼らの生活の場である街はどのように形成されてきたのか、どのように食い扶持を稼ぐのか、独自のスラングがどのように創造されるのか、札付きの不良「ルバ」が持つ独自の文化とはいかなるものか、そしてアビジャンにおける音楽やダンスの歴史など、各章ごとに興味深い問題が設定され、フィールドワークに基づいてその答えが模索される。「際物」と見なされがちな問題領域だが、著者のアプローチは実にまっとうである。

本書が描くのは、一つの文化生成の現場である。ヨーロッパ人によって創られた街アビジャンで、落ちこぼれの若者たちが担うその文化は、正統的なアフリカ文化に対して二重の意味でマージナルである。しかし彼らの文化は、マージナルであるゆえの爆発的なエネルギーを持ち、現在急速に成長しつつある。本書には、まさにそのエネルギーが充満している。

今日、「若者研究」の必要性はかつてなく高まっている。インフォーマル・セクター、民主化運動、紛争における民兵組織など、近年のアフリカで注目される現象では、常に若者が担い手として重要な役割を演じているからである。軽やかな語り口で書かれてはいるが、本書が提起する問題は非常に深い。

(武内進一)

塚田健一著 アフリカの音の世界
東京 新書館 2000年 257p.



本書はアフリカ音楽の概説書ではない。音楽人類学を専門とする著者が、「こむずかしい学問から離れて、自分自身の感受性のレンズを通してアフリカを眺め、そこから見えてくるアフリカの像をそのまま読者に伝えたい(12ページ)、という意図で書き上げた「読み物」である。この著者の企ては、見事に成功している。

著者が取り上げている話題は実に多岐にわたる。アフリカ独自のリズムや楽器の話はもちろん、森の生き物たちの声と人間の声との交換の話、子供たちの遊びに見られる音楽性と創造性の話、アフリカ音楽のスターたちの素顔や彼らの苦勞話など、テンポのよい語り口で次々に話題が変わって読者を飽きさせない。しかもこれらの話は著者の学者としての立場からではなく、フィールドワークの最中におこったさまざまな出来事に率直に驚き感動する、ひとりの日本人としての立場から語られている点が新鮮である。

一方で音楽人類学者としての鋭い洞察も随所に現れて、読む方は時にはとさせられる。「ただ意味だけを理解して文字に置き換えてしまうと……一番大事な物が殺される……。言葉は何よりもまず生きた響きで発せられなければならない」(51ページ)、「楽器の音というのは、言ってみれば鳥の声と同じで」「それをいかにも意味があるかのようにとらえるのは、それに言葉を当てはめる人間の方だ」(125ページ)など、意味深い文章が突然現れる。

評者はこの本を読んでいるうちに、アフリカの本を読みあさっていた大学生の頃の感覚を思い出した。自分の知らない世界の話に時間を忘れて思いを馳せる、あの何ともいえない楽しい感覚。仕事に必要な本しか読まなくなった近頃の自分の貧しい読書を反省させてくれる、楽しい読み物が本書である。

(高根 務)

「少年ケニアの友」東京支部編
アフリカを知る——15人が語る
その魅力と多様性 東京 スリー
エーネットワーク 2000年
226p.



1985年に設立された「少年ケニアの友」は、ケニアの孤児支援を中心に活動するNGOである。その東京支部が86年から、「アフリカを知る」という会を続けている。当時の世話人であった八木ご夫妻のご自宅に、30人から多いときには60人が集まり、アフリカの専門家の話に耳を傾ける。そして講演が終わったあとにはバザーやリンガラポップスのパーティが続く。このような会が、昨年10月までに計26回を数えるに至っている。うち15回分を選んで再構成したものが本書である。

内容は、人々の暮らしやものの考え方に関わるものが多いが、ゴリラやバクタ、病原体や地質などについての章もある。そのバリエーションからくる楽しさは、日本アフリカ学会の学術大会で感じるものに通じる。対象地域だけが共通項のこの学会では、一律に与えられた15分から20分のコマのなかに、報告者が人それぞれのアフリカを凝縮して報告する。二日間、朝から夕方まで出ずっぱりであれば、さまざまなジャンルを取り混ぜざっと30ほどの報告を聞くことができるのだが、残念ながら一般の人が気軽に参加できるものではない。ところが、この本は、それを可能にしてくれるのである。入門書のような見た目と平明な語り口は裏腹に、各章の中身は手加減のない、相当に専門的なものだ。

「アフリカを知る」を始めた動機は、「野生動物と飢餓」のイメージばかりではない、きちんとしたアフリカ理解を深めたい、というものだったという。当時に比べれば、日本に入ってくるアフリカ関連の情報量は格段に増えたが、それでも一般にはアフリカはまだまだ遠い存在である。15年にわたりこのような地道な活動を続けてこられたことに敬意を表するとともに、本書の出版を契機に、日本でのアフリカ理解が深まることを期待したい。

(牧野久美子)